

〔翻訳〕

共有される種子：
オルタナティブな種子実践をめぐる「農民」集団の
アイデンティティ的構築ドゥムルナエル、E., ボヌイユ、C.
須田 文明* 〔訳〕E. Demeulnaere, C. Bonneuil, (2011)
Trans. Fumiaki Suda
Des Semences en partage: construction sociale et identitaire
d'un collectif “paysan” autour de pratiques semencières alternatives.
Techniques & Culture,
no. 57, pp. 202-221.

I. 解題

我々はすでに、本稿のテーマであるフランスの「農民的種子ネットワーク RSP」による在来種の交換及び保全の運動について論考を公刊している（須田 2009）。そこでも述べたように、農業者は作物を様々な基準（例えば、自分の畑に映える美しさ）で選抜することで、作物を飼ひ慣らすと同時に、作物により飼ひ慣らされていく。ここでもこうした種子と農業者との情動に満ちた「仲間づきあい」が、品種イノベーションのあり方の一つとして取り上げられている。翻訳本文のテキストに屋上屋を架すようではあるが、翻訳本文の前に著者の一人である Demeulnaere らによる論文（Demeulnaere, Goulet, 2012）を以下に要約して示すことで、翻訳本文の理解のための一助としたい。なお本文中の図は省略してある。

近年のオルタナティブ農業運動は、生産システムの中心に自然への回帰を置き、自然メカニズムを進歩の源泉として考えている。ハイデッガー的問題設定と同様、技術は、それが自然の表出、完

成を可能とする限りでしか活用すべきでないとするのである（Heidegger, 1958）。こうした実践は、農業における知識及びイノベーションの生産に関心を向ける。そこでは生産性、予測可能性、収穫の安定性を重視する工業モデル＝「人工化の農学」が拒否されることになる。処方された農業技術とそれと関連した人工物（化学肥料、農薬、機械、改良品種など）は、コントロールされた環境条件で受け入れられ、次いで、農業試験場で標準化されるように広大な農場レベルで適用される。このフォード主義的イノベーションモデルはイノベーションを構想する科学者と、これを普及する普及員、これを適用する農業者——品種イノベーションの最終的使用者の役割へと閉じ込められる——との間での分業を制度化する。ところが環境の人工化と実践の標準化とが疑問視されるとき、この知識生産のチェーンはどのような意味があるのか。自然の複雑さ、多様性、予見不可能性が、効率性の新しい基準として確立されるとき、これ

* 農林水産省農林水産政策研究所 〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3-1-1

らの知識生産システムにどんな意味があるというのであろうか。自然への回帰をめぐる、どんな集合的形態が登場し、確立されるのか。技術イノベーションの生産と、集合的行為の形態との間でのカップリングはどの様にして形成されるのか。エコロジー的イノベーションは認識論的変容（知識生産の中心に農業者を再び置くことになる）なしには起こりえない。Demeulenaereらは農業のエコロジー化と、それを促進する農業者のネットワーク組織とを結合しているカップリングを特徴付けようとする。すなわちジェネリックな知識と規格化された事物、執行するだけの農業者、これらから作られるフォーマット化された実践が特異なる事物と農業者に場所を譲り、特殊な社会技術的カップルを形成するのである。

1. 特異なものと多様性の統治

(1) 自然のヘテロ性

RSPでは、多くのメンバーが有機農業を実践しており、そこでは化学的投入物がないことがそれぞれの土壌の特性を表出させる。こうした栽培実践が必要とする品種的多様性は、中央集権化された品種イノベーション様式の限界を示す。これは標準化された環境にとっての少数の品種しか生産できないからである。品種的豊かさのこうした考慮は品種内での intra-varietale 多様性の再活性化を促す。メンバーたちが取り組んでいる古い品種は、改良品種に対して遺伝的なヘテロさを保持している。このことはテロワールへの作物の自然な適応を促すであろう。標準化された農業環境で選抜され、栽培された均質で安定した品種の固定主義的 fixiste モデルに対立するのが、栽培環境の多様性への、ヘテロな品種の自然な適応の進化的なモデルなのである。RSPでは種子が、生物多様性のエンブレムをなしている。状況に関する親密な知識を必要とする、こうした特異なる多くの事物を掌握できる唯一のアクターは、閉じたコルベール主義的科学ではなく、農業者なのである。ユニークで特異なる自然の事物は、農業者の特異性と結合している。農業者こそが生産実践を

通じて、脱人工化と、自然への回帰の挑戦に応えることができる。

(2) オペレーターの特異性

RSPの農業者は中立的でも受動的でもない。土壌や気象、品種の選択、生産システム等が、種子の進化に影響する制約システムをなしている。そこでは、自然と人間とに属することが不可分なのである。RSPメンバーは、作物がその潜在力すべてを表明するように、作物の進化の同伴＝仲間づきあいの役割を演じている。

品種＝農業者のカップルの特異性は生物多様性に言及する。RSPで栽培された品種は、差別的で、変化に富み、それは、運動のアクターたちのプロフィール、軌跡、コミットメント形態と同様である。品種の多様性は、農業者と作物との仲間づきあい経験を多様化させ、集団的知識を豊富にさせるようになる。それぞれの状況で、オペレーターは、その実践を「実施し met en oeuvre」（芸術作品とし）、それは芸術的な意味においてであり、「作品」oeuvreはオリジナルでユニークな産品であり、素材と、クリエイターの作業との出会いである。しかしこの特異性は自然にも人にも関わるが、逆説も示す。もしすべてがそれほど特異であるなら、仲間同士の間でいかなる形態の集合が、これらの運動の中で存在することができるのだろうか。Demeulenaereらは、ネットワークの姿が、これらの多様な諸特異性を結合させ、考慮させることができ、特権的な集合的な姿として課せられるとしている。

2. ネットワーク、諸特異性の集合体

ネットワークは社会学者によって、以下のように分析されてきた。すなわち主体の自律化と、アクターたちの不可分性のダイナミズムとが両立しうる社会化枠組みを供給する組織形態としてである。ネットワーク組織は、現代社会のエンブレムとして描かれ、イニシアチブと自律性を促す新たな資本主義の価値によりもたらされる (Boltanski, Chiapello, 1999)。農業者は自らの特異性の重要性

を主張し、自分自身で、自らの団体を格付けるために「ネットワーク」という概念を使用する。Demeulenaere らは分析においてこの概念を広く捉え、人だけでなく、行為の事物（種子）、これらがいかに社会技術的布置においてお互いに結合するかを示している。

(1) 仲間同士のネットワーク、参照基準の社会空間

アクター自身がネットワークに言及するのは、制度化された集団形態（計画化され、ヒエラルキー化された）から自らを区別するためにである。ネットワークとは、メンバーが平等な地位を持ち、そこでの資源が水平的に流通することを意味する。しかしながら彼らが同一の重要性を持っているわけではなく、特定の人は積極的で重要な役割を持ち、その媒介者としての役割を通じてネットワーク内でより重要な中心性を持つ。不平等なコンピテンスと結合した格差があるとしても、ネットワークは知識の生産と共有に参画する個人の平等を唱っている。非農業者もインフォーマルな集団に帰属することができる（例えば遺伝資源収集センター運営者や、引退した選抜家、研究者など）。

互酬性が仲間内での関係の永続性において中心原則をなし、それは参加の倫理のエンブレムとなっている。ネットワークの中では各人の特異性が混合され、それは富の資源でさえある。各人の特異性が混雑される、こうした組織形態の姿と特異性とは、農業者がそれを中心に組織化される自然の事物（種子など）についても妥当する。ネットワークの展開はアクターと事物（アクターが手がかりを持つ）を含んでいるからである。

(2) 事物とネットワークにおける状況

RSP において、農民的品種の栽培と選抜のために展開された経験の交換空間は、媒介的事物（種子）の流通により物質化される。こうした流通は、二つの主要な機能を有する。最初は品種の希少性、古い、地方的で、商業流通していない品種

と関連している。第二は、これらの種子の遺伝的潜在性を刺激する農業者の目標と関連している。すなわち、品種 = 個体群 *variété-pulation* は、テロワールで進化し、その遺伝的潜在力の発現を刺激するためには、多様な環境で種子を流通させることが良いことが認められている。こうした実践は古い実践（種子を農場に持ってくる前に、近隣の農地で1サイクル、ないし2サイクルの間栽培することで、種子を「生まれ変わらせる」こと）にある。それはまた個体群遺伝学に由来するパラダイムから影響されている。RSP メンバーはこの遺伝学に、INRA の研究者との萌芽的な協力のおかげで慣れ親しんでいるのである。

おわりに

RSP で見られる農業イノベーションは、特異化が生産実践そのものの中心に挿入され、具体化されることを示している。同時に、新しい形態の結合がこの運動から生まれ、農業者に対して、彼らの環境への手がかりを刷新させることを可能としている。ネットワークの姿（社会的なものであるが、事物を含んだ社会技術的なものである）は、アクターとその観察者に対して、はっきりした展望（特異性を受け入れ、結合させるこれらの集団の性格を理解させてくれる）を与えてくれる。

こうした集団の解明は、農業活動をめぐる知識生産の新たな形態を示してくれる。こうした刷新は仲間同士の水平性に由来するばかりではなく、種子のような事物に体现された種子産業部門の技術科学的プロジェクトへのオルタナティブとして提起されたプロジェクトとの接合にも由来する。こうして農業者と研究者とのハイブリッドな装置が確立されることになる。例えば組織された患者と医師との間での、希な病気をめぐる協働もしばしば指摘されている。そこでは、症例の特異性と経験の特異性が本質的なデータを構成しているのである（Rabeharisoa, Callon, 1999）。

オルタナティブ運動の研究は、知識生産に関する、また科学者と「素人」との間の出会いに関わ

る二つの軸を開く。まず最初に、ここで扱われたケースは知識生産と、農業者の作物進化への同伴との装置を進化させるが、それは実践と農業集団のエコロジー化の挑戦に対応するためである。第二に、Demeulenaereらの分析は、イノベーションと知識を、「冷えた」事物(B.ラトゥール)として捉えないことを要求する。特異性とその確認は、研究開発装置の性格に関する移動をもたらすが、動員の性格と闘争、アイデンティティ的緊張

の性格を示してくれる。

例えば有機農業は、技術的政治的規格化を通じて1980年代に飛躍的に発展した。同様に、種子の交換という秘密保持からの脱却は特異性への愛着を必然的に緩和させてしまうものなのだろうか。特異性と集団、その未来との間の接合の新しい形態は、認知的及び政治的争点を強調する。我々の社会の変容をよりよく捉えるためには、観察者は両者を切断することができないのである。

【引用文献】

- Boltanski, L., Chiapello, E. (1999) *Le Nouvelle Esprit du Capitalisme*, Gallimard (三浦、須田他訳『資本主義の新たな精神』、ナカニシヤ出版)
- Demeulenaere, E., Goulet, F. (2012) "Du singulier au collectif", *Terrains et Travaux*, no.20, pp. 121-138
- Heidegger, M. (1958 :1953) "La question de la technique",

- in *Essai et conférences*, Gallimard, pp. 9-48
- Rabeharisoa, V., Callon, M. (1999) *Le pouvoir des malades*, Presses de l' Ecole des Mines.
- 須田文明 (2009) 「フランスにおける作物育種研究の展開：生物多様性の分散的管理のために」、『総合政策』第10巻第2号、pp. 183-203

II. 翻訳

10年ほど前から、GMOをめぐる議論が、農業界における主要な争点として種子を登場させ、農業界を超えて、都会を含む公衆まで巻き込むことになった。フランスの種子に関する規制——多くの農業者にとって、自家採種の自由の剥奪として感じられている——と、また生物多様性の浸食という萌芽的テーマとのいっそうのその軋轢もまた、種子の争点化に貢献することになった。2003年に、農民的種子ネットワークRSPが、作物品種公式カタログObtentions Vegetalesに未登録の品種の種子を作付けし、これを交換する農業者の権利を要求するために発足した。この運動は、市場および規則を通じて1950年代以降規制されている品種によって、自家採種する農業者たちに担われている。市場外で供給するためのオリジナルな戦略の他に、こうした種子に関する選択は、種子の農場での保存と生産に関する知識、また在来品種の特殊な農学的作業についての種別的な知識を必要とする。我々の研究

は、「農民的種子」を中心として構成されている「実践共同体」(Wenger, 2005)を接合した諸要素の分析を目的とする。このために我々は2003年以降、パン用穀物を中心として構成されたこうしたネットワークのうち、とりわけ積極的なグループに着目した¹⁾。

1960年代にH.マンドラースは、ベアルンにおけるトウモロコシのハイブリッド品種による在来品種の代替によって、フランスの農民社会の消滅を特徴づけた。「農民の終焉」と、農場での生きものの再生産と結合したノウハウとソシアビリティの消失との間の結合を強調したのである(1992, p. 365)。この社会学者にとってハイブリッドトウモロコシの普及(その種子は必然的に毎年購入される)は、結局、新しい労働組織化(より個人的で、より専門特化され、市場志向的)、農業者にとっての正統化の新しい参照基準(伝統ではなく農学的科学)、知識の移転(自然についての知識から機械的、経営的知識への)を導入し

た。彼の分析は、我々に、対称的に、古い品種の回復と、生産者による農場でのその選抜の復活が特定の「農民アイデンティティ」（それはまだ精緻化されていないが）の再活性化に参画するのではないかと問いかけるように促す。

民族学の多くの研究は、種子の保存と流通、選抜、生産に関する知識の個人的もしくは集合的管理が、農民社会の構築の中で、いかに物質的、アイデンティティ的、社会的な争点をなしてきたかを示している。いくつかの研究は、栽培作物のアイデンティティ的、社会的な使用＝慣行 usage についてよりいっそうの関心を向けてきた。品種（種子繁殖植物）もしくは栄養繁殖植物（芋類など）は、結局、作物カテゴリと社会的カテゴリとの間で構築された対応（他集団から自らを区別だてすることを可能とする、社会集団により共有された種子の特徴）を通じて、差別化の手法として使用されてきた（Haudricourt, 1964）。集団の再生産は、この場合、「系統」の継続性により補強され、ないし保証される。例えば 1950 年代の Morbihan 県 damagnaise 社会においては、小麦の種子は、できるだけ「系統の断絶」がないように、もっぱら母系制的委譲を通じて流通していた（Laligant, 2007, p. 116）。そこでは種子とその再生産に関連する知識との移転が、特別なネットワークを描いており、（共同体を基礎づけている）社会的関係の印をなしていた（Laligant, 2007）。

21 世紀のフランスはもはや農民社会ではなく、農業の工業化の達成は、田舎の脱魔術化、「系統との断絶」を完成させた。しかし我々は、以下のような仮説を立てている。集合的想像において、とりわけ（こうした工業化の過剰を批判する）農業者において、種子の象徴的、社会的な任務はまだ残っているし、また、その再活性化が、支配的農業モデルへの対抗——新しいアイデンティティを強固にしている——の中心にある、ということである。

まず最初に我々は、在来種をめぐる熱烈な行動へとこれらの生産者たちを駆り立てている物質的理念的支えを説明しよう。そのヘテロさは我々に

以下の問いをたてさせるであろう。すなわち「何が集団を維持させているのか」である。第二部では、種子の流通が我々に示すネットワークの起源を、またその組織化を特徴づけている主要な特徴を記述することになる。第三部では、種子の移転の「モラルエコノミー」（Thompson, 1971, McGuire, 2005, p. 139）を構成している明示的な、また暗黙の規範に注目することで、我々は、こうした交換において維持されている、また集団を結合させている関係の性格を記述するであろう。こうして我々は、構築されつつある「農民的」アイデンティティ²⁾の際だった、弁別的な特徴について結論づけることができよう。

1. 小麦の農民的再領有の個人的原動力

我々が関心を抱いた小麦生産者集団は、個人的イニシアチブ（そのうちのいくつかは 1970 年代に遡る）の交流により構成された。こうしたイニシアチブは、それぞれの方法で、市場流通では入手不可能な小麦品種（それは「古い」、ないし「地方的」、「農民的」、「土着の de pays」などと呼ばれていた）の多様性を復興しようとしたのである。

我々がインタビューした小麦生産者には、いくつかの特徴が共通している。すなわちすべてが、「農民連盟」に近い（必ずしも積極的活動家ではなくとも）。「生産力主義」を拒否し、有機農業（認証があろうとなかろうと）の原則に従い、しばしばバイオダイナミック農業³⁾に刺激されている。彼らはしばしば複数の活動、すなわち加工や農場での販売——パンからチーズの販売——に至る。その他の側面では彼らは異なっている。これらの生産者はしばしば新農村人であるが、必ずしもすべてがそうなのではない。彼らは一般的に小規模の農場を有するが、面積は 2ha から 70ha まで多様である。幾人かは別の者が引退したときに、かろうじて就農している。幾人かは夫婦で働き別の者は共同経営農業集団法人 GAEC で、さらに別の者は一人で働く。結局彼らはフランスの各地に住んでいる。彼らの実践は「歴史的」品種の収集

から、そのテロワールに適した品種の農業者自身による選抜に至るまで、またそれには「田舎の品種」の探求ないし有機農業のために実施される「品種個体群」による最近の選抜栽培が含まれる。我々は、収集した語りから、聞き取られた動機の多様さを描き出そうとした。

(1) 特殊ニーズに適した品種を見つけ出すこと

これらの農業者により実践されている栽培方法の常の一つとして、あまり化学投入剤に依拠しないことがあり、このことが、生産者たちに農業科学の発展以前に栽培されていた品種を探求させることを促す。

「私を古い品種に導いたもの、それは現代的品種が、化学肥料と農薬を使用する図式に基づいて選抜されているという事実にあります。(中略)ところが、有機農業では、化学的肥料も農薬もありませんし、私の働き方に応じて、作物は自分で自分を保護し、堆肥や、それ以前の栽培により残されたままの残滓の中から、その栄養を補給しています」⁴⁾。

貧しい投入材での栽培方法の導入は二つ目の結果として、(そうでなければ農業環境の化学的人工化により隠避されているような) テロワールと土壌のヘテロさを白日の下に晒すことになる。このことは、もっとも適合するような品種を探すために、既存の品種の多様性を探し回るように促す。これこそ、栽培の地方的条件の中でその品種を「進化させる」ように促す。というのも「有機農業の種子を得るためには、これをテロワールに適応させなければならない」からである⁵⁾。

その上、幾人かの栽培農家は、別様の栽培方法での試験に取り組む。例えばパーマカルチャー、もしくは、福岡正信(1983)により理論化された「自然農法」のように。彼らには、種子が直まきされたその草地の中で優勢になるために十分に早く生長する種子、もしくは「真冬」の品種(その春化处理 vernalisation の必要性が、夏にまかれた小麦が冬になる前に伸びてしまうのを防ぐような)が必要であり、こうした多くの品質は近代的

小麦が持ち得ない品質である。別の農業者たちは彼らの経営構造に特殊な制約を語っている。それが彼らの品種選択に反映されているのである。例えば、複合作物・家畜の農民は、その長い、豊富な、家畜の敷きわらとして、また飼料として使用される藁のために穀物の古い品種を評価している。農場で自分の小麦をパンに加工する農民＝パン職人は、粉を挽いたときの品質、粉をこねるときの感覚、色や香りに敏感であり、古い品種に興味深い要素を見出している。

したがって、こうした生産者にとっての争点はまず、きわめてプラグマティックなものである。種子会社が慣行的農業の品種的標準にしか応えていないという背景の下で(Bonneuil, Thomas, 2009)、彼らは、自らの実践の多様性に技術的に適合した種子を自分たち自身で生産しようとする。

(2) 自律性を再び見出す

毎年種子を購入することは費用がかかり、特定の農業者たちは、購入した種子を一つの季節に農場で増殖させることでコストを下げる。それは「全国農場種子保護連合会CNDSF」が擁護する「自由」である⁶⁾。RSPのメンバーたちは種子産業からのこうした金銭的解放に同意するが、以下のように自分たちを区別する。

「CNDSFは農場の種子を再発見しようとするが、私たちは、種子に関する完全な自律性を再発見したいのである。つまり我々自身で選抜を行い、畑の中での選抜に至りたいのである」⁷⁾。

「自律性」のこうした要求は多様な形をとる。それは農場の組織化に関する表象により養われ、バイオダイナミズムは農場を、「自律した組織」と考え、そこでは外側からの投入は20%を超えてはならない(Soper, 1980, p. 22)。この原則の初歩的なバージョンでは、農場外由来の自然資源及びエネルギー資源の消費を削減し、活動を再地域化するためのエコロジ的な配慮に統合される。しかしより以上に、自律性の探究は農業の工業的組織化の批判を再燃させる。つまり工業的組

組織化は課業を専門特化させ、知識をタコツボ化させるので、農業者の意思決定の余地を削減させ、技術主義的構想と農業の資本主義化を刻印した技術システムへと農業者を従属させる。

したがって、自分自身の種子を作ることは、種子産業の技術パッケージ「種子＋植物防除処理」に対する技術的、金銭的克服に参画することである。それと同時に、当該の農業者は、自然とその再生産の経験的、実践的知識を再獲得する。それは、研究者へのイノベーションの委任の原則を疑問視することであり、農業者が選抜のアクターと（再び）なることができることを要求することであり、それによって、生きものの再生産が彼らの仕事（メチエ）の中心にあることを喚起させるのである。

(3) 別様に選抜すること

選抜を掌握するというこうした欲求は、同時に、20世紀に実施された作物育種の近代的パラダイムに対する批判的なまなざしを示している。すなわち「純系」モデルへと向かうための品種の遺伝的均質性の厳格化、製品加工や、多投入でのより多い穀物収穫量の追求と関連したいくつかの特徴への選抜基準の限定（Bonneuil, Hochereau, 2008）、などである。公式カタログへの新品种のあらゆる登録のための「弁別性、均質性、安定性」（DHS）の基準を遵守するという義務は、RSPの農業者にとっては自然に反するものと思われているのである⁸⁾。

さらに彼らによれば、こうした選抜の方向付けは、生態系や消費者の健康と対立する農業の共犯者であり、不均衡で不健全な小麦を生み出すであろうと考えられている（RSP, 2008, pp. 41-43）。近代品種が被ってきた「三重の圧縮」がこれらの表象の整合性を示している。

まず始めに告発されるのは、土壌への作物の低下化である。結局のところ、19世紀末以降の選抜家による矮化の追求（短く固い茎）は、肥料多投により促される、小麦の倒伏を予防することを目的としていた。ところがRSPの農業者たちは

背の高い小麦を追求する。我々はその技術的理由を述べてきたところである。その上、古い小麦が折れることなく風にそよぐこうした能力に積極的価値が与えられ、それは不確実な環境に対するその弾力性の目に見える証明である。さらに、茎の矮化は、バイオダイナミックの生産者たちと衝突することになる。彼らは食用作物を消費される作物の部分に応じて分類し（実、花、根、葉）、作物の頂点に位置する実は、作物が高く伸びるほど、よりよく発達するというのである。最後にバイオダイナミック農法が認めるのは、すべての生きとし生けるものは、土壌に由来する「エーテル的」力により突き動かされるのであり、しかし、最も進化したものにはしか（宇宙に由来する）「天体の」力により影響される能力を認めないのである（Soper, 1980, pp. 22-27）。したがって小麦の高さは作物のよい発達と高貴さの印なのである。たいていの背の低い近代品種は逆に、「自然に反した」、「動かなくなった」ものとして現れることになる⁹⁾。

より重量を稼ぐために選抜家により追求される穂の密集化 compaction は小麦の圧縮の第二の側面としてあわれる。逆に多くの古い品種は「緩んだ穂」を持っており、このことは積極的にとらえられている。というのも、このことによって、穀物に接触する光や大気の浸透が可能となるからである。こうした特徴は小麦の他殖 allogami 率、すなわち遺伝的多様性 brassage の要素を増加させる。

最後に、グルテンの「圧縮」が告発される。穀物タンパク質の分裂 fraction であるグルテンは、グルテニンから構成され、これがバゲットに対して目の粗い特徴を与える。またグルテンはグリアジンからも構成されるが、これはパテの弾力性のために選抜される。一世紀も前から選抜型は「固い」グルテンを持った品種（こねるのに機械化された過程に適した）を促進してきた。しかし栄養に関するいくつかの研究や、グルテンに耐えられない自分のクライアントたちとの直接的交流にもとづいて、RSPの農民＝パン屋は近代的グルテ

ンの栄養的品質と消化性に抗議する。特定の医師の立場や、自閉症児へのグルテンなしの食事の利点の効果に基づいて¹⁰⁾、何人かは、「丸まった en boule」グルテンの大きすぎる圧縮 compression と、「自分の世界に閉じこもった bulle」子供の間との結合の存在を結論づけている。「自分の世界に閉じこもったグルテン」は近代社会の個人主義とコミュニケーション不可能性のメタファーとなった。当然の結果として、治療法は、(作物はそれが治療する病気のサインを自らの中に含んでいるという、「サイン理論」を想起させずにはおかないのだが)、自分自身へとそれほど内向していないグルテンの消費にある。

バイオダイナミズムによりもたらされる植物の全体論的観念においては、異なったレベルでのこの三つの「圧縮」がシステムをなしていると考えられている。こうして小麦の穂の観察は立ったままでの植物の状態についてもグルテンの状態についても情報を与えてくれる。低い小麦はより凝固しており、この凝固は、パテの中にも見られるし、体内にも見られる¹¹⁾。こうした確認は50年以上前から支配している基準とは異なった基準での選抜作業を採用することを示し、それは、選抜家によってそれほど働きかけられてこなかった品種を取り上げることによってなのである。

(4) 作物との友人関係を確立すること

追求される目標と結果以上に、選抜手法もまた非難されることになる。すなわち合理化によって、作物のきわめて少数の特徴へと、選抜圧力が厳格になり、「不正な細工を施された」小麦の製造を促す¹²⁾。生きものを尊重していないとして考えられるこのような手法から保護されるべく、古い品種は「均衡」の探求に応える。近代主義の功利主義と還元主義との断絶としてとらえられる、RSPの小麦集団のメンバーが作物との間に築く関係は「仲間づきあい」に近づく。「作物に友愛に満ちた感動的な注目が与えられるという条件で、世界の知恵とインスピレーションの源泉となることができる」(Lieutaghi, 1991, p. 190) 作

物との間で築かれる関係、である。

「以前には、よいやり方をするために、私は自分の仕事を最小限にきり縮め、たった一つの(ほとんど一つの)小麦品種とわずかばかりのエンドウ豆、トウモロコシだけにしていた。できる限り少なくすることで生計を立てること。しかし自分の労働への愛情なしに、何になろう。憂鬱になってきた。Jean-Francois がその小麦に触れ、愛撫し、何とも情熱的に自分の言葉でそれについて語るのを見聞きしたことが私を深く感動させた。私はすぐに、自分の救いがたい無知がわかった。私は土とともに、作物とともに生き働く。こうした作物は、私が目を見開き、私の心が、こんなにも親しく私を取り囲んでいるものの美しさに私の心を開かせるならば、美しくきれいになることができる。従って私は、一部を偶然に任せ、固定されていないこれらの古い小麦たちに関心を持ちました。」¹³⁾

しかし小麦と接触している人間のパーソナルなこうした変容がなされるのは、小麦が、単なる手段としてではなく目的として完全に受け入れられる限りのことであり、なすがままに操作可能な事物としてではなく、その品質とその制約とを備えたパートナーとして受け入れられる限りのことなのである。ある人々が懸念しているのは、集約型農業の中で、作物が消滅してしまうのではないかということである。そこではこの作物はもはや完全に合理化された生産システムの中で従順で、不活発な要素でしかないのである。古い小麦と一緒に働くことの悦びは、まさにこれらの小麦を栽培し、もしくは加工する際に彼らが出会う困難(その栽培実践やパン作り実践の微調整なしには)に由来する。つまり彼らは特徴を持った小麦を再発見するのである¹⁴⁾。それは思い通りには扱いはなく、もはや「オブジェとしての作物」ではなく「存在としての作物」となる(Lieutaghi, 1991)¹⁵⁾。それによって、彼らは、要求されている愛着の関係に入り込むために、自然管理の理念型から自らを防御する(Latour, 2000)。

2. 種子と知識の交換ネットワークの構築

2003年2月に Auzeville (Haute-Garonne 県) で、「農民的種子の最初の会合」時点で、初めて個人的イニシアチブの交流がなされた。このイベントは農民連盟と、有機農業のための複数の NPO により組織された。これらの団体は、種子の農場での生産実践を可視化させたかったのである。商業的種子へのオルタナティブの担い手たち——組織者のそれぞれのネットワークのおかげで同定され、事前の調査で調べ上げられていたのだが——が招待され、会合の終わりに「農民的種子ネットワーク」が設立された。この期間に、「農民的種子」という造語が登場し、その意味が安定化し、1950 年以前での選抜もしくは「集団選抜 sélection massale」¹⁶⁾ の品種に由来する、農場での複数の季節にわたり再生産された種子を示すことになった (Demeulenaere, Bonneuil, 2010)。

小麦生産者は定期的な会合を組織することを決定し、Auzeville に招待された研究者やクレルモンフェランの穀物遺伝資源全国ジーンバンクの運営者もこれに招かれた。引き続き数ヶ月の後には、アクターたちは多数のロットの種子を送付され、彼らの視点と意見を交換することになる。徐々に、種子と知識の交換ネットワークが構築された。

(1) 研究者と制度的アクターを補完的に関与させる、農業者間での協力ネットワーク

2005 年に、私たちは訪問した農場で存在する品種の体系的な目録を作った。それは、誰によって、どの時期にこれらの品種が取得され、誰にそれが伝えられたかを示すものであった。徐々に、我々は、種子のロットの流通を再構成した。このフォローの背景にある方法論的選択は以下のようなものである。つまり科学的協力のネットワークにおける境界的事物 (バウンダリー・オブジェクト：訳者) に倣って (Vinck, 1999)、種子の流通が当該のアクターたちのネットワークを描き出し、私たちにその組織的特徴のいくつかを観察することを可能としてくれる。

描き出されたネットワークは分散的な特徴を有

しているように思われる。しかし交換は、クレルモンフェランのジーンバンクセンターを中心にしていっそう密度が濃いままである。たとえ特定の生産者が、自らの周りにいっそうの交換を集積しているとしてもそれは、彼らが無制限の量で、広範な品種の選択を提供できるからであったり、彼らが地方サークルにおいて評判を獲得しているからであり、農村振興や「農民的」組合や有機農業の地方機関により、もしくは、小麦の保存を目標として新たに作られた NPO (南東部の Touselle、Lot-et-Garonne 県における古い小麦収集研究センター Centre Terre d' Accueil et d' étude des Blés anciens、西部での Triptoleme 等) により評判を得ているからである。

しかしながら州の間に橋が架けられた。最初の時期に情熱に駆られた人々が Auzeville で出会い、それ以降、強い絆で結ばれた。定期的な全国的レベルでの会合もまた、様々なアクターを結合させることができ、彼らはその地方のダイナミズムに対して自律性を得た。こうしてネットワークはその「弱い紐帯」を強化させ (Granovetter, 2000)、知識と品種の容易なる流通を可能とすることになった。

ネットワークの分散された構造——そこにおいて研究者は周縁的な位置しか占めないのだが——は、選抜の集権化の純然たる拒絶の印である。強い分散によって各人は、自分が必要とする資源そのもの (種子及び情報) にアクセスすることができる。しかも媒介物による「義務的通過」を制限しながらである。ネットワークの関係の効率性は、それが、工業的種苗業者に対して抱く敵意に照らして見られるべきである。全国種苗業種間集団 GNIS (種苗業者を連携させ規則的なコントロールの機能を付与されてもいる組織) に彼らに対立させている力関係において、RSP のアニメーターたちは (抑圧の口実を与えない、急速に増殖できる) インフォーマルな機構を構成しようとする。それは、実践の普及の度合いが、確かな現実を (もはや不適切と思われる) 規制へと対立するようになるためにである。

(2) 「種子は、すべての人に関わりがある」：専門特化の拒否

ドナーと受け手との二重の地位がネットワークのアクターたちのたいていの人々を特徴付け、組織の強い別の原則として、分業の拒否を引き出すことを可能とする。彼らにとってはイノベーターと種子増殖者、使用者との間の亀裂——種子部門の慣行的組織化を支配している——を再生産すべきではないのである。逆に各人が学習へと飛び込まなければならない。「種子は、すべての人に関わっているんだよ」¹⁷⁾。

「最初は、私は、古い品種の種子を販売するために、以前からやっていた作業から、利益を得ることができると自分に言い聞かせていた。やがて、私は、自分にとって興味深いのはそんなことじゃない。大事なのは、各人が行動を起こすことなんだと自分に言うようになった」¹⁸⁾。

大量の商業的交換がネットワークの中で存在していたとすれば、それはそのメンバーの大多数によって低く評価されたことであろう。彼らはそこに、種子に対する商業的、功利主義的關係の始まりを、また専門特化（買い手の手抜きを正当化するであろう）の危険性を見る。ところが争点は、選抜の知識を集散的に再び我がものとするところなのである。リスクは、工業的種子生産組織の小規模レベルでの再生産に至ることであろう。

ネットワークに当初のそのダイナミズムを維持させ、その倫理的基礎と矛盾した逸脱からこのネットワークを保全することは、アクターの側に対して、ルールと価値への一致した遵守を提起することを要求する。その全体性において検討される種子と知識の交換様式、つまり経済的で物質的のみならず社会的文化的でもある次元の関与としての交換様式を通じて、その概要を得ることができる。

3. 種子流通の中心にあるモラル・エコノミー

(1) 市場的論理でもなく自由流通でもない：社会的に制約された交換の要請

農民的品種の交換に取り組むたいていの人々に

とって、取引きの性格は「贈与」と同一視されている。しかし数キログラムを超える量については、供給者はしばしばその費用を支払ってもらえる。しかし移転の金銭的バランスシートは彼にとって中立もしくはマイナスであり、また支払われる金銭は、種子を準備するために投じられる時間の無償さに見合わない。とりわけ移転は互酬性の形をとる。それは例えば、NPOのTouselleの地位に開示され、「tousellesの種子ロットのすべての受益者は、受け取った量の倍を返さなければならない。それが今度は新しい関心のある人々に利益を与えよう」(Reseau Semences Paysannes, 2008, p. 82)。グルノーブルの下部ネットワークでは、もし誰かが受け取っても返さない場合、次回には彼には与えられない。しかし互酬性の義務は、コンテクストに応じて異なった形態と強さをとる。特定の人たちにとっては、取引きはかなり排外的な相対の二人同士の関係であり、別の人々にとっては、共同体のルールへの単純なる同意であり、つまり課業の専門特化の拒絶の当然の結果として、いつの日にか別の誰かに与えるという暗黙のコミットメントである。この第二の解釈において、互酬性は時間がずらされ得る。それは学習時間であり、交換のチェーンが開放されたままになっている(Weber, 2000)。

交換の形態として贈与を明示的に要求することで、農業者たちは、社会的に制約的な取引きへの彼らの選好を確認し、それは経済理論により理念化されているような市場取引きに関与した関係の、匿名的で、義務的で、一時的な特徴と対立しているのである。逆にRSPにおいては、ドナーと受け手との間の結合が、時間を通じて強化されることを目的としている。それはしばしば処方や専門的知見の要望の形をとったり、共同で栽培された品種をめぐる経験の共有の形での相互のフォローアップの形をとる。

市場交換と自らを区別しようとして、このネットワークの農業者たちは、特定の交換を拒絶する権利を確認する。いったん交換がなされるや、もはや相手と相互作用しない自由(市場的論理)よ

りも、彼らは、自分たちが誰との交換にコミットするかを選ぶ自由を選好する (Godbout, 2000 による贈与の論理)。こうして Untel は、悪く使われることを懸念して、自分の県の農業会議所に種子を与えることを拒否した。社会的に制約ある交換のためのこうした論拠は、Kokopelli との意見の相違のある点である。この NPO は人間の共有財産としてみられる生物多様性の名の下に、種子の自由な流通のために活動している。このことはインターネットの使用法の違いにも示される。つまり Kokopelli はそのサイトでカタログを提示し、ネットで注文することを可能とする。他方で RSP のサイトは議論と、この NPO の日常活動に向けられており、いかなる場合にも個人間での直接的接触はない。

したがって交換のこうした「愛着ある＝粘着性の attaché」性格は市場的取り引きと、また同様に、公共サービスの枠組みで実現される交換とも対立する。後者のモデルがクレルモンフェランの遺伝資源センターの活動を構成しており、そのミッションは、標本へのアクセス申請に応えることである。この収集センターのエンジニアの Jean Koenig と、Jean-Francois Berthelot (お土産にパンを持って行った) との間の最初の出会いがこれら二つの世界の間のずれを示している。

「私はクレルモンフェランの INRA に行ったよ。彼らが私に種子をくれるのかどうか、私がどういう風に受け入れられるのかも知りもしないのにね。(中略) 何人かの人たちが言っていた。

『えー、連中のところからもらってくるなんてやわなことじゃないぞ』。でも私は言った。『よし、俺はそこに行ってくるよ』。どっちにしろこんな風にコンタクトがあった方が良かったから。私はクレルモンフェランに到着し、次いでジャンが私を極めて淡々と迎えてくれた。いったん私の話に耳を傾けると、彼は『あなたは何がほしいんですか』と言った。(中略) 私は、『あなたたちは何種類持っているのですか』と尋ねた。彼は『8,000』と応えた。彼はコンピューターのスイッチを入れ、画面上にカタログリストを次々と表示した。

(中略) 彼は言った。『私たちには全部があり、それは入手可能だ。あなたがほしいものがあれば、あげることもできるよ。』彼は私をびっくりさせた。私は今までのことより多くのことを知った。(中略) そして私は本を取り出した。その中で私はより地方的な品種のところに小さな葉を挟んでおいたのだ。私はまずはじめの葉のところを開き、彼に頼んだ。『この品種なんだけど、あなたは持っていますか?』、『ええ、ええ、ありますよ。』私は二番目の葉のところを開いた。『これは?』、こんな風に2度、3度、4度、5度、6度と…。私は自分に言った『彼はこれ以上はくれないだろうな』。彼は『まだ他にあるかい?』¹⁹⁾。

このエピソードは二つのモラル・エコノミーの間のずれをはっきりと説明している。すなわち公共サービスの無償の自動的給付のそれ、他方での実践の共同体に状況づけられた社会的に制約的な交換のそれである。P. リクール (2004) によれば、モノの商品化と並んで贈与の倫理化も他者 autrui、他者性 alterité への関係を修正し脅かすことになる。ところでネットワークの農業者たちは、彼らが相互作用したがる人々の間で選別を行っている。人の差別化された待遇の原則を受け入れることで、彼らは他者の承認に必要な条件、無差別性を逃れる関係に必要な条件を再構築する。存在の他者性を評価することのリクールにより指摘された重要性はここでは、(仲間づきあいを通じて) 作物にも人にも適用される。こうして RSP のモラル・エコノミーは人と小麦との間での愛着と同時に、(仲介された小麦による) 人同士の間での愛着を高く評価する。

交換に先立つインターパーソナルな結合の存在が種子の効率的流通を決定する。それと相補的に種子は社会的結合を物質化し、強化する。すなわち「10 年がたった今、私はある品種を友達に引き渡すとき、彼らにその名前を付け替えるよう促す。それは同一のもの以上だ。でも、軌跡を眺めていると面白い。例えば、もし私が彼らに引き渡したのが Rapais という品種ならば (それは小麦であり、それがどこから来たのかわからない。

でも私は愛情を持っているので、そのためにこれを Rapais と呼んだ。ブラジルの友人に呼びかけるようにね。彼らは例えば「Rapais を起源とする Tintin」という名前によってこれを指し示すことができる。(中略) 小麦が旅行するのはいいものだ。自分のところに小麦が帰ってくるとき、それは家族に歴史＝逸話をもたらしてくれる。²⁰⁾

ネットワークにおける種子の流通は、農場から農場へのその移動を通じたその変容によって、もしくは名前の変化によって示される²¹⁾。社会関係と種子の交換が相互に豊穰化し合い、補強されるので、交換を可能としたのが社会関係なのか種子なのか、他のものへと変容したのが人間なのか小麦なのかを忘れさせるほどである。

(2) 「受け手がそれに値するかどうか見極めなければならない」：作物による人の評価

したがって農民的品種の収集家は誰にでも種子を与えるわけではなく、自分たちが、これを受けると値すると判断する人々にだけ与えるのである。彼らが、その相手が種子をうまく使ってくれと感じるときがその場合であり、受け手が作物によって飼育慣らされるようになると感じるときである。彼が作物を観察し、これを発見する時間をとれるだろうと感じる時である。自らを納得させるために、最初の試みのためにいくつかの粒が譲り渡される。品種評価の全国システムを逆転させるという展望の下で、人間が作物により試験されるのであってその逆ではない。問題は次のようではない。つまり「どの様な品種がカタログに登録されるに値するか」ではなく、「古い品種の栽培への候補者は、(慣行的品種よりもより注意を必要とする) 品種を栽培するのに成功するだろうか」である。

少量の種子から始まるこの入門的局面はリスクの最小化の要請によってもまた正当化される。こうして Jean-Francois Berthelot は、小面積から始めて、次いで、これの農学的要請がよく知られるようになったら、徐々に面積を拡大することを勧める。候補者が自分に与えられた少量の種子か

ら名誉ある収穫を得られたならば、また彼が作物に耳を傾けその栽培実践を適応させることができたならば、そのときには、彼はより大量の種子を受け取るに値すると認められる。その上、彼の根気は彼のモチベーションを証明する。この点は付け足しではない。つまり生産主義的農業モデルの危機と、「品質の経済」(Allaire, 2002) の登場とともに、古い品種がますます影響力を持ち、あらゆる水準の農業アクターたちを引きつけている (Bonneuil, Thomas, 2009)。ところがこうした「オポチュニストたち」²²⁾ (身も心も完全にはコミットしない) は、「作物への誠実さと愛」を持たず、ネットワークの中では好ましくないものとして現れる。

品種によって馴致されるままに過ごした時間は、お互いにとって慣れるために作物にとっても人にとっても利点となっている。フォーマル及びインフォーマルな出会いが増すに応じて、ネットワークのメンバーたち (古くからの及び志願者) は、お互いに知り合うことを学び、徐々に、ネットワークに内的なルールと価値と適合した相互行為の基礎を作り上げる。

(3) 地方空間とネットワーク内部でのヒエラルキー

共同体への入会は段階ごとになされるのだから、多数の品種の所有者は、彼の活動のすべてに、そこらの誰にでもアクセス可能にさせるようなことはない。つまりもっとも大規模な収集家によって農場訪問が組織されるが、ある種の不透明さが実在し、それは、この活動にすでに関与している人にとってしか除去されないのである。最も「貴重な」品種が交換されるのは、同じ情熱を持った同人同士の間なのである。

「つまり貴族の宮廷に入るわけではない。お互いに知り合わなければならないし、評価も獲得しなければならない²³⁾。」

複数の分野に応じて暗黙のヒエラルキーが確立されている。すなわち実践的ノウハウ、人々を結合させる能力、品種の実際上の豊かさ (収集家の

間での良い後代の競争、そのうち何人かは200品種まで持っている)、希少品種の所有、もしくは変わった表現型を持つ品種の所有者、品種についての逸話を語る学識や能力などである。

関係の主観的で不透明な特徴が、種子の流通を合理化させるという欲求（遺伝資源の農場での保全を最適化させようと望む遺伝学者を誘惑するかもしれない）と緊張関係に陥る。もしくはすべての交換のパノプティコン的な地図を作り上げようという私たちのような社会科学研究者の主張と緊張関係に陥る。こうした主観性は、RSPのアニメーターにより定期的に実施されるプロジェクト（それぞれの交換を知らせるための取り決めを定式化するという）ともまた緊張関係に陥る。それは、各人が、誰それのところでどれこれの資源が入手可能であることを知ることができるための水平的な透明性を確立しようという考えに基づいている。

(4) 統一原則としての多元主義：共通の参照基準としての生物多様性

RSPにコミットする人々の利益は極めて多様であるが、選抜実践や品種選択の基準、人々の間での交換方法、これらを規格化することなど問題外である。生物多様性への繰り返される言及——それは、RSPに対して、自らの活動を正当化させ、その主張に多くのアクターたち（科学者であれ、市民社会であれ）を参加させることを可能とする——は、内部において、メタファー的役割を演じている。その意味において、この生物多様性への言及は各人に対して、（集団を構成する）人々の多様性を承認することの重要性を喚起し、紛争解釈の枠組みを与える。こうして「小麦グループ」の普及リストについて流されたEメールに引き続いて、あるメンバーは、多元主義的価値を自然化する小麦の多様性の見方を人間集団の中へも包摂することで、多様性を尊重している。

「件名：私は、均質化と均質性の白昼夢を見ているのだろうか

集団は、植物個体群のようなものであり、

みんな同じように作られているが、お互いには似ていない諸個人から構成されている。想念と行動の忍耐、他者の尊重、差異の受容こそが、その基礎を結合しているのである。これらの結合なしには集団は形骸化し、崩壊する。

2008年2月4日」

実践の均質化への公然たる抵抗にもかかわらず、時間がたつにつれて、とりわけ、集団が直面した試練に応えるために経験によるルールの設定が見られることになる。ネットワークの開始に貢献した黒穂病（小麦のうどんこ病）、GNISの攻撃（これにとっては認証された種子のみが「清潔で、忠実で、市場的な」品質を保証する）が農業者に対して、種子交換の時に、黒穂病に対抗する体系的な処置を促すようにさせた。それは明確なルールではないが、共有された、「模範的逸話」（Auray, 2000）（処置がなかったためにすべて失われてしまった）の流通により促進された予防の態度である。

RSPが新たな賛同者の加盟を促すことが重要であるとしても、それでも暗黙で、それほど定式化されておらず「学習の静寂」（Auray, 2000）に内面化されたルールに従って共通善を共有する仲間のこうした共同体が、これらの新参者勢力の潜在力と、もっとも古い人々により共有された歴史への彼らの適応との間の均衡を見出すようにすることが決定的である。

結論

1970-90年代に古い品種もしくは在来種を再び栽培した農業者たちにとっては、これらの品種は、技術的機會（特殊なニーズへの適応の可能性を供給する）、政治的てこ（種子産業に対する自律性を再獲得すること、近代的選抜を批判すること）、存在論的位置づけ（存在するもの *êtres* として作物を考慮する、作物との関係様式を構築すること）、これらを示していた。2003年のRSPの創設——それまで孤立していたこれらの人々を関係づけた——以来、種子は特権的で、特殊な社

会的結合のネットワークの運び手ともなった。

そのメンバーたちの多様性（地理的、社会的、文化的）にもかかわらず、集団を維持させているのは、選択されたインターパーソナルな関係枠組みの中で伝達される生物学的存在物の媒介であり、選抜と栽培をめぐる集団学習状況における生物学的存在物の媒介なのである。農場から農場へと流通し、こうした流通に応じて進化する事物として（いくつかの表現型が選抜され、遺伝型が適応し、特定の混合 *melanges* と交雑 *croisement* とが行われ、新しい名をつけられる）、種子は「媒介的事物」を構成し、これは集合的行為をコーディネートすると同時に、こうした行為の結果を体現する（Vinck, 1999）。種子は、これに働きかける人々の「発明的刻印」（Auray, 2000）を運び（その名称、遺伝的構成）、種子は人や場所に結合されたままに残るのであるから、流通している種子はこのネットワークを強固にし、それは人と小麦の歴史を緊密に混交する「縫い目のない組織」の中へとこのネットワークを統合するのである。

農場での選抜へのコミットメント——古くからの人々の実践により要求される継続性と同時に、その作物品種の中に統合されている——、自然への全体論的で感情移入的な関係の確認、仲間同士から構成される相互に顔見知りの関係の社会的ネットワークへの統合、これらが、個人的差異を超えて、グループのアイデンティティを構成している。このように実践される種子の交換が、遂行的行為をなし、それにより、生産者たちは「農民」的世界へ帰属している感情を実現し共有する。こうした世界は、「農業経営者」の姿、オブジェとしての自然を経営する長いサプライチェーンのたんなる一環とから断絶して構成される世界である。生きものの再生産を中心とした知識と社会的結合を集合的に再活性化させることで、RSPは歴史としての自然を喚起させる。そこでは、大量生産的事物がもはや「等価性や無差別性」（Baudrillard, 1976, p.85）によってしか結合されていないような一列縦隊の工業的論理に対抗して、「農民」が栽培作物（際限のない変化により

ユニークである）の世代間での誕生に同伴し、これを導く。

しかしながら、これらの農民の基準となる帰属共同体は、「ベイ（広域行政圏）」という地理的単位をではなく、特別な実践と価値の共有を枠組みとするのである。この共同体は部分的には地方グループで構成されるが、それぞれ、RSP という名称の最初のタームの選択において透かしてみられるようなダイナミックで網の目上の見方に応じて、自らの地域では少数派で地理的、社会的な場所の多様性へと分岐している（例えば研究者を統合することで）。慎重にヘテロで、流動的でダイナミックな農民的アイデンティティというこうした定式化は、選抜実践に反響し、それは、古い品種の文化遺産的で固定した見方を逃れるのである。すなわち遺伝的多様性をつくりだすために多様な品種がお互いに混雑され、その地域の品種がその原産地の外側で栽培される。こうして Demeulenaere と Bonneuil (2010) は種子の取り扱いと、「他者の取り扱い」（Haurdicourt, 1962）との間の対応性の新しい次元を説明する。種子の使用において、「同定＝アイデンティティ化」のゲームが完全に役割を演じている。すなわちこれらの実践から生じる品種は、これを栽培する人々と同様に、ヘテロで、進化的で、歴史に根付き、他者と結合されている。こうしてグループとの活動を社会的に構造化している媒介的事物いじょうに、共有されたこれらの種子は、これを栽培する集団の網状のメタファーである。「農民的種子」という表現においてこの形容詞は最終的に、種子と同様、これを形作る人々を格付けしているのである。

【原注】

- 1) 地理的断片化、彼らの活動を中央集権化している形式的組織がないこと、カタログに登録されていない品種の種子の交換の非合法性を考慮すれば、その数は評価しがたい。2005年に、我々は、農民同士の間での種子の交換について体系的な調査を行ったときには200人近い人が調査された。それ以降この数は増加している。

- 2) この調査結果は、フランスの様々な州において、RSPのメンバーもしくはそのシンプの小麦生産者について行った調査に基づいている。2003年から参与観察が始まった。2005年の春には、我々は、20ほどの個人インタビューを行った。次いで、我々は、より網羅的に、RSPの加盟下部組織（Touselle, Aspaari など）とRSPそのものにより組織された会合を、より包括的にフォローした。
- 3) バイオダイナミック農法は、ゲーテのロマン的全体論的植物学に触発され、1920年代にルドルフ・シュタイナーにより発展された神秘学的潮流の人智学 anthroposophie の農業的適用である。
- 4) セバスチャンさん、Alpes-de-Haute-Provence 県 Longo-Mai 村のメンバー
- 5) アラン・バソンさん、複合作物家畜経営で、Marne 県。私たちは、彼の合意の下、公的、もしくはメディア上での活動を行っているネットワークのアクターたちの名前を記録した。
- 6) CNDSP により実施された調査によれば、経営者の55%は「自由原則への愛着」により農場での自家採取を行っている。農場での自家採取についての全国調査の要旨については以下を参照。http://www.semences-fermieres.org/documentation_semences_fermieres_10.php (2011年10月19日接続)
- 7) ギー・カスレル Guy Kastler, RSP の2005年の事務局長
- 8) アラン・バソンさん、上述（ただし、省略された図への注にある）。「このDHSってのは、常軌を逸してるよ。私はこんなもの、ばかばかしいと思うね。だって、作物は安定し得ないし、いつだって進化したがるんだから」
- 9) ジャン・フランソワ・ベルテロ、Lot-et-Garonne 県の農民パン職人
- 10) このテーマは論争的である。「論争：グルテンなしの食事は科学的に適切か？」INSERM, no.199, mai 2006. La Lettre d'Autisme France, no.26, aout 2006 に再録。
- 11) 2003年にDelamour村でのJ-F. Berthelot
- 12) J-F. Berthelot 上述。
- 13) ヴァンサン・シェスノーさん、転換中の農民パン職人、Vendée 県
- 14) ジャン・ピエール・ボロニーニさん（Ardeche 県 Longo Mai de Treynas 村における小麦栽培者で収集家）は、Saissette 品種の「反抗的で、反順応主義的な特徴」が好きだという（RSP, 2008, p. 89）。
- 15) Joceline Porcher や Vinciane Despret, Florence Burgat といった社会学者や哲学者は、工業的畜産における家畜の消失について同様に書いている。
- 16) こうした活動の職業化の以前に農民により使用された技術で、視覚上、もっとも興味深いと判断された穂と種子を「多数混合して次世代を育て選抜することを繰り返すことで dans la masse」選抜することにある。

- 17) アラン・ボマールさん、Isere 県
- 18) A. バソンさん、上述
- 19) J-F. ベルテロさん、上述。
- 20) ベルトラン・ラセーニュさん、複合作物経営、Dordogne 県
- 21) A. バソンさん、上述
- 22) ベルナル・ロノーさん、引退した複合作物経営者、Cote d'Or 県
- 23) B. ロノーさん、上述。

【参考文献】

- Allaire, G. (2002) "L' Economie de la qualité, en ses secteurs, ses territoires et ses mythes", Géographie, Economie, Société, 4 (2), pp. 155-180
- Auray, N. (2000) "Le savoir en réseaux et l'empreinte inventive. Des droits coutumiers du gnu au dinosaure de Netscape", Alice 3.
- Baudrillard, J. (1976) L'Echange symbolique et la mort. Gallimard.
- Bonneuil, C., Hochereau, F. (2008) "Gouverner le <progrès génétique>. Biopolitique et métrologie de la construction d'un standard variétal dans la France agricole d'après-guerre", Annales HSS (6), pp. 1305-1340.
- Bonneuil, C., Thomas, F. (2009) Genes, pouvoirs et profits. La recherche publique dans les transformations des régimes de production des savoirs en génétique végétale de Mendel aux OGM. QUAE
- Demeulenaere, E., Bonneuil, C. (2010), "Cultiver la biodiversité. Semences et identité paysanne", in Hervieu, B. Et al (eds) Les Mondes agricole en politique, Presses de Science Po, pp. 73-92
- Demeulnaere, E., Goulet, F. (2013) "Du Singulier au collectif. Agriculteurs et objets de la nature dans les réseaux d'agriculteurs <alternatives>", Terrains et travaux.
- Fukuoka, M. (1983) La Revolution d'un seul brin de paille, Editions de la Maisnie.
- Godbout, J. (2000) L'Esprit du don, La Découverte.
- Granovetter, M. (2000) "La Force des liens faibles". In Le Marche autrement, Desclée de Brower, pp. 45-74
- Haudricourt, A-G., (1962) "Domestication des animaux, culture des plantes et traitement d'autrui", L'Homme, no.2, pp. 40-50.
- , (1964) "Nature et culture dans la civilisation de l'igname, l'origine des clones et des clans", L'Homme, no.4, pp. 93-104
- Laligant, S. (2007) Un Point de non-retour. Presses Universitaires de Rennes.
- Latour, B. (2000) "Factures/facturés : de la notion de réseau à celles d'attachement", in Micoud, A. Et

- Peroni (eds) Ce qui nous relie. Editions de L' Aube, pp. 189-207
- Lieutaghi, P. (1991) La Plante compagne, Conservatoire et Jardin botaniques de Genève
- McGuire, S. (2005) Getting genes, Wageningen University
- Mendras, H.(1992[1967]) La Fin des paysans. Actes Sud.
- Réseau Semences Paysannes (RSP) (2008) Voyage autour des blé paysans
- Ricoeur, P. (2004), Parcours de la reconnaissance, Stock.
- Soper, J.(1980) "Pour comprendre le cours aux agriculteurs de Rudolf Steiner", Courrier du Livre
- Thompson, E.-P. (1971) "The Moral economy of the English crowd in the eighteenth century", Past and Present, no.50, pp. 76-136
- Vinck, D. (1999) "Les Objets intermediaires dans les réseaux de cooperation scientifique", Revue française de sociologie, XL(2), pp. 385-414.
- Weber, F. (2000) "Transactions marchandes, échanges rituels, relations personnelles", Genèses 41. pp. 85-107.
- Wenger, E. (2005) La Theorie des communauté pratique. Presses de l'Université Laval.